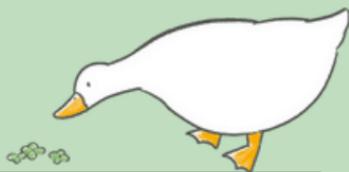


予約者限定

「私に自由を！」と願う人へ

「因果の法則」を知ってこそ、本当の自由になれます

伊藤健太郎 著



なぜ、自由を願いながら、

自由に生きられないのか。

その原因は、「自由」を誤解しているから

「運命」を論ずる時に、避けて通れないのが「自由」の問題です。

第5章で「因果の道理」は「宿命論」ではないことを示しました。善いタネをまけば必ず、善い結果が現れます。心掛け次第で、未来の運命は明るくできるのです。

しかし「因果の道理」の説くとおり、全ての結果に原因があるとすれば、「善をしよう」と思ったことにも原因があり、その原因にも、さらに前の原因があることになります。私の「意志」も過去の原因で決まるなら、自分の行動を選ぶ自由はな

く、結局、運命は自分では変えられないと思う人もあるでしょう。しかしそれは、全くの誤解です。

例えば私が今、休憩きゆうけいにコーヒーを飲もうと決めたとします。それは誰だれかに、「紅茶でなくコーヒーを飲め」と命令されたものではありませんから、自由な選択せんたくです。しかし、もしその選択せんたくに原因がなかったとしたら、どうなるでしょう。喉のどが渴かわいていなければ、眠気ねむけも感じていないのに、突然「コーヒーが飲みたい」という欲求ぼくせうが湧わいたことになります。

過去の経験や周囲の環境かんげいと無関係に、原因のないところから「意志」が生まれたら、その結果は悲劇です。もし自分に、どこからともなく「自爆じばくテロがしたい」「自宅を燃やしたい」という衝動しょうどうが起きたら、自由どころか狂気きやうきでしょう。「自由意志」とは決して、「原因のない意志」ではありません。

どんな小さな結果にも必ず原因があるという、厳肅げんじゆくな「因果の道理」が例外なく成立しているからこそ、私たちは自由に生きることができのです。しばらく「自由」とは何か、考えてみましょう。

もつと自分の好きにさせてほしい。

いちいち文句を言われたくない。

誰にも邪魔じゃまされたくない。

私に自由を！

財産や名声、美貌びぼうや才能より、自由こそ一番の願いではないでしょうか。定年退職して悠々ゆうゆう自適じてき、お金も時間も体力もある人が、「ちよつと三カ月ほど、ヨーロッパ一周に行きます」などと言っているのを聞くと、理想の生活に思えます。私たちが、つらい現在に耐たえているのは、自由気ままな将来を夢たみてのことではないでしょうか。

ところが現実には、自由どころか、その反対の強制や支配ばかり。生徒は学校に、夫は会社に、主婦は家庭に縛しばられ、年を取ったり病気になるれば、自分の体が不自由

の元になります。

なぜ、自由を願いながら、自由に生きられないのでしょうか。

「学校が悪い」「社会のせい」「給料が安いから」「能力が足りないから」など、さまざまな理由が考えられます。しかし、それらは根本的な原因ではありません。

たとえ受験戦争や出世競争から身を引いても、それはレースから遠ざかっただけで、真の自由には近づけないでしょう。転職や引越ひしをして、今までの煩わしい人間関係から逃のがれても、別の不自由がやってきます。私の自由を奪うばっているのは、レースでも他人でもありません。

自由になれない原因はただ一つ、「自由」という言葉を誤解しているからです。

正しい意味を知りさえすれば、今から自由になれます。間違まちがった目標から解放されることが、自由への第一歩なのです。

なぜ、金や権力で、自由は買えないのか

「選択肢」が増えることと、

「自由」が増えることとは、全く違う

本当の「自由」とは何か、結論から申しましょう。

「自由」とは、「限られた選択肢せんたくしの中から、自分でよく考えて決断すること」です。

ここでいちばん大事なのは、「自分でよく考えて」という部分です。「自由」とは「自らよに由る」ということです。親の言いなりや、周囲の真似まねをしていたので

は、「自由」とはいえませんが。「本当に、これが自分の望んでいるものなのか」「本当に、これが私の進むべき方向なのか」と、自分の理性で深く反省し、考えることが大切です。この「自由な思想」を捨ててしまったら、感情に振り回されるだけの、不自由な一生に終わります。

ところが多くの人は、「自分でよく考えること」は重視せず、それよりも「選択肢が限られていること」に不満を感じ、何とか選択肢を増やそうとしています。ここに、私たちが自由になれない原因があるのです。

私たちの持つているお金は限られていますし、能力にも限界がありますから、何をする時でも、おのずと選択肢は限られます。例えば連休の計画を立てる時に、経済的に余裕があれば、海外旅行もできますが、そんな人は多くないでしょう。自分の懐と相談して、温泉一泊にするか、近くの公園で妥協するか、決めなければなりません。

希望の学校や企業があっても、要求される能力がなければ入れないように、買い物から就職、結婚にいたるまで、何をする時も、私たちの選択肢は限られています。

だから「不自由だ」と感じるのでしょう。

現状に満足できず、もつと旅行がしたいと願う人は、収入を増やす努力をしますし、今は無理でも、どうしても入りたい大学のある受験生は、必死に勉強をします。収入や能力が増せば、選択肢せんたくしも増えるでしょう。しかし「選択肢せんたくし」が増えることと、「自由」が増えることとは、全く違ちがいます。この認識が、真の自由を知るカギです。

経済力や才能、地位を「権力」という言葉でまとめるならば、権力を握にぎった人ほど、他の人にはできないことが可能になり、選択肢せんたくしが増えます。多くの人は、「選択肢せんたくしが多いこと」を「自由」だと思っているので、何とか選択肢せんたくしを増やそうと、広い意味での権力を求めます。しかし、権力は皆みなが欲しいのですから、自分がより多くの力を持つには、ライバルに勝たなければなりません。

苦労は承知で権力を求めるのなら、それはその人の人生ですが、次から述べるように、「権力」と「自由」とは、全く異なります。「権力」を「自由」と錯覚さつかくしている限り、自由は手に入らないでしょう。

なぜ、億万長者も不自由なのか

「選択の数」を増やすより、

「選択の眼」を養うことが、自由への道

選択肢せんたくしの数より、もっと大事なものは、正しい決断です。どんなに選択肢せんたくしが多くても、よい選択せんたくができなければ意味がありません。お金があれば、有名ブランドの洋服を欲しいだけ買えますが、選ぶセンスが悪ければ無駄遣いむだづかに終わるでしょう。高級レストランで好き放題に食べていたら、病気になって食事制限が必要となり、普通ふつの人より何倍も不自由になってしまいます。

資産十億ドル以上のビリオネア（億万長者）は、世界に千人ほどしかいませんが、

彼らは満足しているのでしようか。百万ドル持つミリオネア（百万長者）は、豪邸や家用ジェットなどを購入して、富豪の「仲間入り」をしようとはしません。しかしビリオネアとなると、ミリオネアですら買えない物を手に入れて、自分はそこの金持ち連中とは「違う」ことを見せつけないと、満足できません。

そんな彼らが好むのは、世界に一つしかない最高級の芸術品や、数個しかない「限定品」です。なぜ一枚の絵に巨額の金をつぎ込むのか、常識では量れないでしょう。しかし、富豪の中の富豪でないと買えないような、極上の一品でないと、彼らの桁外れに高いプライドは保てないのです。他の人が買えない物を買わないと満足できないとは、なんと不自由な生き方でしょう。

着たい服を着て、食べたい物が食べられることは、確かに魅力的なことですが、そういう生活ができる「権力」を手に入れる前に、まず身につけなければならぬのは、お金や財産、体力や時間を「何に使うべきか」を知る力ではないでしょうか。「選択の数」を増やすより、「選択する眼」を養うことが、自由への道です。

多くの人は、権力を握れば自由になれると思つていますが、ただ力さえあればよいわけではありません。財力や能力を何に使えば幸せになれるのか、「使い方」を知ることが先決です。

確かに権力のある人ほど、選択肢は多くなります。普通の人には、「嫌いな人を殺す」という選択肢はありません。相手を上回る体力がなければ逆に殺されてしまいますし、警察に捕まったら一巻の終わりです。しかし、いくら独裁者になつて、誰にも罰せられず人を殺せる立場にいたとしても、そんな選択をすべきではないでしょう。

権力を得て好きなことをするのが幸福だと思つている人々に対して、プラトンは「善」をする人こそ幸福になる人であり、権力に任せ悪に走る者は、この世で最も不幸な人間だと説きました。その論証は、次の章で紹介します。

選択肢さえ増やせば自由になれるのではありません。選択の幅を論ずる前に、正

「したいことをする」のが自由ではない

その時々で感情で行動したら、

「自由」どころか、「自滅」するだけ

私たちは日々の生活の中で、常に選択せんたくを迫せまられています。今日、何を食べるか、テレビはどの番組を見るか、休日はどう過ごすかという、ささいな選択せんたくから、進学や就職先、結婚相手けっこんあいてを決めるといった、一生を左右する選択せんたくに至るまで、命ある限り「あれかこれか」を選択せんたくしなければなりません。その「あれかこれか」を、自分でよく考えて決断することが、本当の自由です。

そう聞くと、「考える必要なんかない。自分の気持ちに素直に行動すればいいん

だ。それこそ自由な人生だ」と言う人もあるでしょう。この主張の問題点の一つは、「自分の気持ち」が、自分でも分らないことです。

「私は何をしたいのか」「どうなりたいのか」を知るのは、それほど容易なことではありません。「この大学の○○学部で、こういう研究がしたい」という明確な目標があれば、苦しい受験勉強にも耐えられます。しかし実際は、「大学で何をすればよいか分からない」という受験生も、少なくないようです。「大学は、受ける授業も自分で選べるから、勉強したいことを学べる自由な環境なんだよ」と言われても、やりたいことが見つからない人は、魅力を感じられないでしょう。事実、目標を持たずに入学した生徒は、楽に単位をくれる「よい」先生を探して、せっかくの自由をつぶしているように見えます。

「自分は社会に出たら、こうしたい」という夢のある学生よりも、「自分は本当は何がしたいのか」が分からないので、とりあえず安定した職を探す若者のほうが多いのではないのでしょうか。

精神科医フランクは、現代人は、生きる方角を誰からも教えてもらえないので、

「自分が何をしたいのか」を見失っていると指摘しています。だから、他人の真似まねをしたり、ただ周囲の期待にこたえようとするだけの人が、増えているのです。

人間はほかの動物とは違ちがって、衝動しょうどうや本能が人にどうすべきかを教えてくれるわけではない。また、昔の人とは違ちがって、伝統や伝統的な価値が人にどうすべきかを教えてくれるわけでもない。現代人は、こうした方向を指し示してくれるものが欠けた状態の中にいて、自分がなにをしたいのかが、時折分かんなくなっているのである。その結果はどうだろう。ほかの人たちがしていることを自分もするという画一主義か、さもなければ、ほかの人が自分に期待することをするという全体主義を生み出しているのではないだろうか。

（『生きる意味』を求めて）

自分が何をしたいのか、何をすべきか分からないのは、本当の「自分」が分からないからです。「自分とは何か」は、第7章で論じました。

「自分の気持ちのまま生きることが自由だ」という主張の、次の問題に移りましょう。「自分の心のまま、何でもできたらいいな」と思うかもしれませんが、現実には、私たちはそんな無謀な決断はしません。

自動販売機で飲み物を買う程度のことならば、「スッキリしたいから炭酸」「汗をかいたからスポーツ飲料」というように、その時の思いで決定しますが、私たちは重大な決断であればあるほど、「自分の思い」などは無視するのです。

例えば、「人生で二番めに高い買い物」ともいわれる乗用車を選ぶ時、店に入った瞬間に「あ、この車いいなあ！ 二百万か、よし買おう」という人は、まずいいでしょう。他の車種の燃費や乗り心地、安全性能、価格などを念入りに調べて、どれを買うべきかを考えます。

これを買いたいという、自分の気持ちをいったん抑えて、冷静に何を買うべきかを追求するのです。大事な決断であればあるほど、私たちは一時の感情よりも、「こうすべき」という必然性を重視します。

「自分の気持ちのまま生きることが自由だ」というメッセージを実践じっせんしている人は、現実にはいないのです。「自由」とは、思ったとおり振ふる舞まうことだと思われがちですが、「これが欲しい」「あれが気に入らない」という、その時々で感情で行動したら、「自由」どころか「自滅じめつ」します。私たちは大事な決断であればあるほど、感情に振ふり回まわされず、自分は何をすべきかを真剣しんけんに考えるのです。

「自由」に生きるには、「私はこうすべき」という、客観的、必然的な真理に従わなければなりません。

「自由」と「必然」は矛盾するのか？

「こんな原因には、こんな結果」という、

必然的な法則を知ってこそ、

自由に生きられる

まかぬタネは絶対に、生えません。全ての結果には必ず原因があり、起きるべくして起きた「必然」です。そう聞くと、「自由意志など存在しないのでは」と心配する人がありますが、「自由」と「必然」は矛盾するどころか、「必然」だからこそ「自由」になれることを、これから示したいと思います。

私たちの体は、特に異常がない限り、右手を上げたい時には右手が上がりますし、左手を振ろうとすれば、左手が揺れます。「右手を上げよう」と思ったという原因

があれば、必ず「右手が上がる」という結果が起き、「左手を振ろう」という原因には、必ず「左手が揺れる」という結果が生じます。「こういう原因には、必ずこういう結果が生じる」と決まっているからこそ、私たちは「自由に」両手を動かすことができるのです。

右手で握手しようとしたのに、しびれて動かなかつたり、左のストレートパンチが出てしまったのでは、自由どころではありません。「体をこう動かそう」という自分の意志と、体の動きの間に厳密な因果関係があつてこそ、自由に行動できるのです。

釘を打つ時も、「ハンマーをこの位置から、この角度で降り下ろせば、釘に命中する」という法則が成立していなかったら、ハンマーを自由に使うことはできません。そんな法則がなく、釘を狙っても、十回に一回は自分の手や隣の人を打つてしまうデタラメな世界では、ハンマーなど握れないでしょう。

「こうすれば必ずこうなる」「こんな原因には、こんな結果」という、必然的な法則があるからこそ、私たちは思いどおりに動けるのです。ただし、いくら厳粛な因

果法則が存在していても、人間がそれに従わなければ、自由にはなれません。鳥のように自在に飛びたければ、重力や空気抵抗くうきていこうの法則にのっとって、飛行機を設計する必要がありません。

必然の法則を知り、その法則に従ってこそ、自由になれるのです。

フランス人に愛を語るには、フランス語を学んで、文法規則に従って話をしなければなりません。文法も単語も無視して、「あなたが好き！ アイラブユー！」と叫さけんでも、おかしい人と思われるだけです。複雑な文法規則を勉強するのは「不自由」と思いかもしれませんが、規則をマスターしてこそ、自由に会話ができます。「文法なんかどうでもいい！ とにかくボクはあのパリジェンヌに愛を伝えるんだ」というのは、自由ではなく「わがまま」です。

現実世界の法則を知らずに、望みがかなうはずがありません。ヘーゲルは、自由と必然は対立するものではなく、自由は必然を含ふくんでいると言いました。そんなヘーゲルを、「自由と必然性の関係をはじめて正しく述べた」と評価するエンゲルス

は、自由とは、自然界の法則を離れようと空想することではなく、法則を認識し、その法則に従って計画的に行動することだと論じています。自由とは「事柄ことについてからの知識をもつて決定をおこなう能力」なのです（『反デューリング論』）。

どんな行いが、どんな運命を生み出すかという、必然的な道理を知ってこそ、自由あに生きられます。私に自由をあたえてくれるのは、「権力」ではありません。運命の「知識」です。